

神さまと夕焼け

樹下太郎



神 さまと 夕焼け



Copyright © 1984

神さまと夕焼け

昭和56年9月14日 1刷

定価 九八〇円

著者 樹下太郎

発行者 清水大三郎

発行所 株式会社 サンケイ出版

東京都千代田区大手町一の七の二(〒100)

TEL(東京)二三一七一一(代)

大阪市北区梅田二の四の九(〒530)

TEL(大阪)三四三一二二(代)

印刷 サンケイ総合印刷

製本 丸山製本

*万一、乱丁落丁の場合はお取替えいたします

目次

誕生日	7
運命	19
すきやき	27
春	39
思い出	45

よし江ノト	初秋	旅行	るす番	八月	夏がくる	うた	定年のひと	會長	息子	美人	新人
	175	162	152	137	122	111	102	90	81	69	56

はなやかな日々

204

神さま

220

銀杏

228

十一月

238

ネギと大根

242

長編小説

神さまと夕焼け

誕 生 日

三月三十日、五十八歳になった。

朝起きたときはどしゃ降りで、会社につく頃は雨脚が弱くなった。昼にはやみ、三時頃には青空が見えるようになった。

そんな空をながめていると傍にやってくる男がいて人事部係長の坂井だった。

将棋の好敵手でもあった。

「お誕生日おめでとうございます、西川長老」

控え目に、ということはほかの社員にわからないようにということであるがにやりと笑いながら言った。

「くだらない。パースデーなんてのはせいぜい中学生どまりの行事だよ」

「ま、長寿のお祝いということもあります」

はいプレゼント、と坂井は西川の机の上に置いた。

「なんだい、ポケットウィスキーか」

「とんでもない舶来のブランドーですよ。ぼくはこれを買うのに無理をしたんだ」

「それはありがとう」

「ところで」

と、隣席の椅子が空いているのを引き寄せると、坂井は西川の傍に腰を据え、一服つけた。

こういう暢気なところが坂井の欠点だ、と西川は思う。だから四十二にもなって係長なんだ……。

「ところでなんだい」

西川が促すと、

「あと二年ですね」

「うむ」

この会社の定年は六十歳なのである。一応五十五歳定年で、あと働きたいものは役員を除いては、昇給なし、肩書ははぎとられるなどのつらいめにあうのであるが、それでも六十までは働いてよろしいということになっている。少々屈辱であったが、それでも西川のように残る社員の方が断然多いのであった。

「二年経ったらどうします」

坂井の口調には少々意地の悪いところがある。

「読書三昧かな」

「六十になっても、平均寿命までまだ十年と少しあるんですよ。そんな暢気なこと言っていないでいいんですか」

「じゃあどうしろというんだね」

「定年六十五歳を叫んだらどうですか」

「バカらしい。おれはそんなに働きたくないよ」

これは西川の本音だった。

五十八になった、よくこれまで無事につとめてこれら

たものだと思っていたところなのである。

「そうかなあ。ぼくなんか一年でも長く会社にしがみついていたと思うんですけどねえ」

要するに坂井は気楽な男なのだろう。

坂井が去っていったあと、退社時刻の五時近くになって、岡野がやってきた。

「おめでとう」

と同じようなことを言う。

「なにがめでたいもんか」

「まあそうむくれるな。一献さしあげたいがどうだい。やろうよ、西サン」

岡野は微笑している。この男はいつもいい笑顔をするのだった。同年輩だった。

「岡サンの誘いとなると、ね」

西川は思わず笑ってしまう。

なにしろ、西サン・岡サンの仲なのである。

岡野は古いつきあいなので、西川の誕生日を知っているのである。

昭和二十四年の春、同時に入社した。新聞広告による中途入社である。

もったもその頃は中小企業では、いや大企業でさえも中途入社は多かった。大学・高校新卒入社が大げさに叫ばれはじめたのは昭和三十年代にはいつて早々からのことではないのか。

入社試験は十二、三人に一人の激戦であった。

世の中がそろそろ落ち着きはじめて、あわてて正業に就こうという連中が殺到したのである。もちろん、西川もそのひとりであった。

いまでこそいくらか名の売れている「林事務機KK」であるが、当時は「林文具有限会社」だったのである。それに向かつて五十人近くが応募したのである。

昭和二十四年は、「やっぱりサラリーマンの方が食いつぶれがない」と男たちが考えはじめた時期のような気が、西川にはしてならない。

三人採用された。

西川と岡野と沖。

沖は五年後に辞めていった。

「革命がくるんだ。こんな会社にはのんびりしちゃいられない」

というのがかれの別れの挨拶だった。

いまだうしているだろうか、と西川は思い出す。

西川も岡野も本社勤務であった。

本社は京橋にある。

京橋あたりの寂しい横丁を曲がって、またその露地のつきあたりみたいなところに、二人の行きつけの小料理屋があった。

その店が繁昌しているのは、その静かな雰囲気を楽しむんでいる客が多いからだろう。つまり、常連でなりたつ

ているのである。

店の名を『ぶらぶら』

二人がのれんをくぐったのは六時過ぎであった。

「あら、お早いね」

と、マダムが言う。

「この男のハッピーバースデーなんだ」

と、岡野が答える。

「じゃあ、鯛がよろしいわね」

「いや、鯛は二年先にしてもらおう」

と、西川は辞退した。「二年先、還暦になるんだ」

「還暦かあ」

岡野が感に堪えたように呟く。

「岡サンだって一緒じゃないか」

と、西川。

「いやだねえ、むざむざと長生きしちまったって感慨を覚えるねえ」

「詰まらないこと言うなよ。平均年齢考えろよ。還暦の

あとボーバクたる十年が待ってるんだぜ」

「西サンはどうやって暮らす」

「読書三昧——と一応カッコいいこと考えてるけど果た

してどうかね。眼がいかれちゃうんじゃないかと思うん

だよ」

「やめてくれ。バースデー向きの明るい話にしようよ」

マダム、板前、若い女の子の三人だけの小さな店だっ

た。

マダムが言った。

「バースデーに明るい話があるのはせいぜいはちまで

よ。あたしなんかバースデー大嫌い」

「いくつぐらいからそれを意識するようになったの」

と、西川。

「二十三のとき」

「なにかロマンスがあったんだな」

「心中未遂」

「え？」

「彼は二十五歳だったのよね。結婚するつもりでいたん

だけれど、両方の親がうるさくてね。むかしの話でしょ。

あたしの誕生日を名残りにいつそ一緒に死んじまえて

結論になったわけ」

「乱暴だなあ」

「むかしの話だから薬局でカルモチンなんか自由に見え

る。でもどっさりは買えないわねえ。三、四軒回って買

い集めたの」

あの頃はカルモチンとか猫いらずの自殺が多かったな

あ、と西川は思い出す。

「で、それで」

「それが大笑い。多摩川のがス橋の下で死ぬことにきめ

たまでいいのよ。それからクスリとサイダーを用意し

てそこへ出掛けたまではね」

「うむ」

「ロマンチックだったわ。ところがあとがいけないの。量を飲みすぎて二人ともみんな吐いちゃったの」

西川と岡野は思わず笑ってしまった。むかしはそんな話が多かったのだ。

「でも明け方になってふらふらになった相手の男の言うことが癪に障るじゃないの。」サイダーじゃなく水だったら成功したんだ。だってさ。こんな言い草ある」

「しかし、そりや名言だ」

西川たちは笑った。

「で、それからは」

「土手で別れたきりそれっきり」

「……」

「いまだに会ってない。会いたくもないのよ」

「誕生日に死ぬってのはアイデアとして悪くはないね」と、岡野が口をはさんだ。「きれいさっぱりとけりがつくからね」

「おれに今日死ぬって言うのか」

と、西川。

「そう、つかかるなよ。ただし、満五十八歳で人生を全うした、なんてのは悪くないじゃないか」

「そんなの、おまえがやれ」

いつそ死にたいと思うようなときが何度かあった。が、何故か死んでは損だという氣持が西川にはあって、

氣楽な性分のせいだろうか。いや、戦争のせいだと思う。戦争では死にたくないひとたちが死んでいった。そのひとたちのことを考えると自分勝手に死ぬなんて以ての外だと考えてしまう。

「おれもいやだ」

と岡野は答えた。「生きられるだけ生きてやる。世の中って案外おもしろいことあるものな」

「お色氣の方は」

とマダムに訊かれ、

「ああ、その方は落第だ」

岡野は悲痛な叫び声をあげた。

「西さんはどうなんだい」

「おれの方は落第じゃなく、卒業しているよ」

西川は笑った。

「お色氣がなくなったら生きがいは半分ぐらいに減っちゃうんじゃないの」

と、マダム。

「そういうマダムはどうなんだい」

「お色氣の代わりに金欲で生きております」

「商売繁昌一本やりか」

「ううん、株よ。商売の儲けなんてタカが知れてるもの」

「こりゃ、悪酔いしそうだな。なあ、岡さん」

「うん、お色氣の点で迫られるともうどうしようもない

感じだね。女性とおつきあいというのは考えてみればすごい生きがいだった。いま極端にそれが薄れている。枯れかかってるってことかな」

西川も同じことを考えているところだった。

「西さん」

「うむ」

「おれたち、お色気回復運動でもやろうじゃないか。やつぱり性欲こそ生きがいの根本じゃないのか。こうやって酒ばかり飲んでちや具合が悪いんだよな」

「そうじゃないのよ」

と、マダム。「お酒で元氣をつけて勇ましく出かけるのよ」

「じゃあそうするか」

西川は元氣よく答えたものの、心のなかではまるでその氣はない。岡野にしてもこのまま飲んでいる方が愉しそうな顔つきであった。

マダムがよその席の客の方へ移っていった。

「ところで西さん、あんたに生きがいってあるのか」

「生きがい？」

西川は問い返したあと、「そんなものあるわけがないじゃないか。鳥に生きがいがあるか、犬に生きがいがあるか。ありませんよ。生きがいだんだんだとほざいているのは人間の僥越というものだ。人間として生まれちゃったから人間として生きてゆく——これがおれの

生き方なんだがねえ、岡さん」

「ま、おれもそれにはおおむね賛成だけど、もうちょっと派手な人生でありたかったような氣がしてしようがない」

「たとえば」

「女遊びしたりギャンブルしたり」

「うむ」

「そういう連中もいるってことなんだよな」

「そういえばギャンブルだけは思いきりやってみたいと思つたことがおれにも何度かあるよ。ツイてる、と分かつているのに資金がないんだな」

「とすると西さんの生きがいはギャンブルか」

「ま、女よりもギャンブルだね」

「嬉しいよ、西さん。おれもそうなんだ」

「あらたまつて言うことはないだろう」

西川も岡野も競艇が好きなのである。一緒に出かけることも多い。

競馬では二人とも場外馬券ファンである。中央競馬場に出かけるのは年に三、四回だ。

いい友達といえるだろう。

「ただしだな」

と、西川が言った。「ギャンブルにのめりこめなかつたのは、おれたちの世代の氣の弱さだったのだからか
ね」

「うむ、おれたちの世代はおとなしいんだよ。まして大正生まれはね」

「どうしてだろう」

「ギャンブルは罪惡だったからね。脳天からたたき込まれた。おれの場合親父がうるさかったから、子供の頃花札なんて見たこともなかった」

子供っぽいトランプ遊びで我慢するほかはなかったのだ。

「おれの場合は——」

と岡野が言った。「おやじがばくち好きで一家が泣かされたという過去がある。そういう場所に入りしやたらしいんだな。それでおれもすっかりこわくなっちゃって、いい年齢になってから程々になることになっちゃった」

「そうなんだ、われわれはいつも程々に、なんだな。競艇が好きだからって年に十回がやとこさだろう」

「あつたかくなつたからまた行こうじゃないか」

「うん行こう。五十八なんだ、破滅的な大勝負をしてみたいね」

「百万円注ぎ込むか」

「ばからしい、二十万がせいぜいだ」

「スケールが小さいねえ」

と岡野は笑った。西川も笑ってしまった。

「ま、なにとても程々というのがおれたちの長所でも

あり欠点でもあったわけだ」

と西川は言った。

「長所の点はほとんどちよびりだったような気がする。われわれの世代は弱かったなあ。戦前、戦中、戦後と。なあ西さん」

「それをいつたきりがない。戦争の本当のことを知らせてくれたのは戦後もしばらく経ってからのことだもの」

まあ、むしろかしいことは別にして、今宵は「よくも五十八まで生きてこれたものだ」というのが西川の実感であった。岡野も、全くその通りだと共感してくれた。

その晩は二次会、三次会はやらなかった。西川の誕生日ということで岡野が気を遣ってくれたのだろう。

「誕生日にポッキリなんてならないように気をつけよう」

それが岡野の別れの挨拶だった。

「ポッキリはおれの願いだよ」

西川は言い返してやった。

西川は五十分でわが家に帰ることができる。小さな平屋だが、わが家である。

二階を建てるといふ話が何度かもちあがつたが、西川は頑強に拒否した。

二階を建てれば長男夫婦と一緒に住むという構想がうかぶ。西川はそれを極端にきらった。(それじゃ長男が

可哀そうじゃないか)

ここは老夫婦だけの住居です、ほかには誰も一緒に住めませんよ。——そう宣言したつもりでたてこもっている平屋だったのだ。(にもかかわらず長男に嫁のきてがないということはあとの話にしましょう)

「只今」

「お帰りなさい」

女房は茶の間から返事している。テレビの前から離れないのだろう。

茶の間へはいると案の定ヘンなドラマをやっている。

食卓の上でんと舶来のブランドーが置かれている。

ピンクのリボンが巻かれている。

「順一からのバースデー・プレゼントですよ。今夜は仕事で遅くなるからって昨日預かってたの」

「あのやろう親父の誕生日なんかどうでもいいのに」

「これは夏子からです。貧者の一灯ですなんて電話してきて送ってきたの」

西川は丁寧に包装をほどいた。靴下が三足はいっている。

「これは明日はきます。忘れないでくれよ、おかあさん」

と西川は言った。

父親の誕生日なんかどうでもいいんだ、バカヤロめと、西川は叫びたかった。

「みんなで集まってお祝い出来ればいいんだけどねえ」

と、女房。

「とんでもない。こんなクソジジイの誕生日を覚えていてくれただけで上出来だよ」

西川の本心だった。

子供は二人。

長男の順一は商社に勤めている。

次に生まれた夏子は結婚した。夫は中小企業に勤めている。

どちらも一応順調にしているのが西川としてはありがたいことであつた。

順一と夏子の夫が話が合うのも、はたで見えていて気持ちがいい。

問題は順一の結婚である。

順一自身にあまり積極的に結婚する意志がないのも事実であるが、どうもいまの世の中は長男というのが嫌われているらしいのだ。

——おまえもう少し元気だして社内恋愛でもやったらどうなんだ。

西川は息子をそうけしかけたことがある。

——それがダメなんだね。結婚にまで漕ぎつけるやつは次・三男なんだよ。たとえばいくら恋愛でいいところまでいっても、結婚となると長男というだけでシャット

アウトなんだよ。

——おれは別居しようと言ってるんだぜ。

——でも、ダメだね。最後の責任とるのは長男なんですよ、ってわけだ。

——いまの娘たちはみんなそんなふうになっちゃったわけか。

——まあね。ま、そのうちいいひと探すよ。

そのとき順一の口調は気楽だった。気楽そうに思えた。本心はどうなのか。

苦勞していい大学を出してやった。お陰で一応のところへ就職も出来た。が、結婚で躰くとは西川としては予期せざる出来事というほかはない。

見合い話も三つ四つあったが、考えてみれば長男ということと相手に敬遠されたようだ。

その息子がくれたブランドーを、妻が注いでくれた。

「おまえも飲めよ。乾杯というこゝろ」

よし江は急いで自分のブランドーグラスを持ってきた。

乾杯する。カチン。おめでとう、とよし江が言う。

ま、一応おめでたいということにしておこゝろ。

「お互いに元気でよかった」

「これからもね」

「しかし一寸先は闇っていうからな」

「いやなこと言わないでよ」

「順一はなんで遅いのだ」

「お酒じゃなくマーシャンじゃないかしら」

「暢気なやつだ」

「独身貴族ですからね」

「ばからしい」

西川は笑ってしまった。

「でも海外旅行にも四回も行ってるし、うちには月に三万円しかいれなくて威張っているんだから、あれは明らかに貴族だわ」

「いまだに三万円なのか、図々しいやつだ」

「図々しいから貴族なのよ」

よし江は日本酒が好きだが、大体に於て酒に弱い。ブランドーをちょっと口につけただけで酔ってしまったみたいである。

「貴族はいいけどいつまでも独身じゃまずいでしょ、おとうさん」

「おれに相談されたって困るよ」

「おとうさん顔ひろいんでしょ」

「むかしはね。しかしその頃は順一はまだ適齡期じゃなかった。いまのおれなんて会社でもクソジジイだよ」

女にはその辺の事情は判ってもらえないのだろうと思いい、西川は悲しくなってしまう。

「あたしだって知りあいに当たって見るんだけど、長男って可哀そうなね。しかも両親が健在となると」